

終戦 松島海軍航空隊同期の死

宮城県 櫻田 喜一郎

私の父は特進の陸軍中尉、大東亜戦争は仙台の部隊、勲六等単光旭日章を受章しております。復員の時は、祖母、父母、弟二人、妹三人と九人家族でした。その父が職業軍人で満州第八百五十三部隊におりましたので、私も関東省春化などで、昭和十四、十五（一九四〇）年ころ、約一年、日本人学校におりました。ソ連との国境近くで、ウラジオストク方面は肉眼でもロシア人がスケートで走り回っているのが見えました。小学校四年ころ内地へ帰って来ました。

私は県立佐沼中学四年で甲種飛行予科練習生を志願しました。全国中学生は、この年だけ五年、四年生と一緒に卒業したことが思い出されます。

我が母校の旧制県立佐沼中学の先輩には真珠湾攻撃の軍神・鈴木三守中佐がおります。また当時、

我々練習生は夢中で近くの梨畑に逃げ込みましたが、その時、私と一緒に入隊した同期で岩手県出身のI君（昭和二年六月十五日生れ）が敵弾に当たり、八月九日午前九時四十二分に死亡しました。名誉の戦死でした。

飛行兵長が戦死したのも、その時でした。その飛行兵長は、何を思ったのか、逃げ込んだ梨畑から次の安全なところへ逃げたのですが、その時真つ向からグラマンの攻撃に合い、バツタリと名誉の戦死でした。私のいた前方十メートルの所でしたので、今でも当時のことが目に浮ぶように思い出されます。

そして後で知ったのですが、飛行兵長の受けた機銃弾は、右背部盲管肺損傷を引き起こしていました。私は夢中で梨畑から田圃に逃げ、稲の中をはいつくばって、やっとの思いで鹿妻の山の中に逃げ込んだのです。そこは小高い丘で、航空隊を見下ろすことができましたが、ちょうどグラマンの攻撃で航空隊の中は火の粉が巻き上がるように

学校訪問と言って陸士、海兵、学徒動員などの先輩が訪問してきて、学校は軍人一色でした。県立佐沼中学にも配属将校が来て、毎日のように軍事訓練に明け暮れていました。文字通り身体に傷害のある人以外は軍隊に志願せよとの声がいっぱいで、軍国主義一色でした。

私の海軍航空隊の入隊は土浦海軍航空隊で、第二岡崎航空隊で普通科の教程・訓練を経て、松島海軍航空隊に配属されました。

この航空隊は郷里に近く、ここへ配属されたことにはとても喜んだものでしたが、ここは練習航空隊で、一式陸攻、九六艦攻などの大型機の練習航空隊でした。そして私達は練習生ですから、教程や訓練でも何も分からず、毎日が精一杯でした。折しも八月八日、九日、十日にわたって、金華山沖に現われた米空母「ヨークタウン」から、延べ一千機とも言われたグラマン・カーチス戦闘機が来襲し、機銃掃射を主体とする激しい奇襲攻撃があつたのです。

燃えているのが見えました。

その敵襲が終わった三日後に、この空襲で戦死した同期のI君や飛行長の亡骸を鹿妻の火葬場で荼毘に付し、夜、航空隊葬を行い、ご遺骨等はそれぞれ故郷に送られた訳です。当日はもちろん八月で暑い日でしたが、お棺の板の合わせ目の間からは虫が湧き、そして臭いも激しく大変気の毒に思いました。そして我々も二、三日は食事も喉を通らない有様でした。

また当時は、松島航空隊には敵空母による空襲に対処するために、第七百六航空整備隊、第四百五銀河飛行隊などが配属になっていました。航空隊からは敵空母の偵察のため偵察機二機が飛び立ちましたが、内一機は未帰還機となつたまま終戦になつたようでした。

終戦五十年も過ぎたある日、町内の予科練の後輩である中野寿郎君の私宅に一冊の本「空染む屍・三浦大助、弟の銀河を追って」が届きました。

彼は「櫻田さん、終戦時に松島航空隊におられ

たと聞きましたが、当時のことが詳しく書かれております。この本は、米山町吉田公民館にごさいます。その未帰還の一機が隣町の三浦大策一等飛行兵曹、木村隊長同乗の先輩なのです」と語ってくれました。

彼の生家は登米市中田町大泉神畑でした。お盆には中野君と兄である三浦大助氏宅に行き、私は終戦時に松島航空隊にいたことを話し、当時の空襲で航空隊の惨状の様子を詳しくお話しました。

そうすると、大助さんは「実は弟の戦死が、どうも不思議な感じで、役場退職後、助役もしながら矢本の航空自衛隊の教官たちにお聞きし、これまで調べ上げたものを記録した本です」と話し、次のように語ってくれました。

弟大策は愛国心の強い弟で、十一人兄弟の末っ子、父母も大変ほめていたようでした。大正十五（一九二六）年五月二十日生れ、昭和十七年九月一日、第二海兵団志願、昭和十八年七月二十四日、丙種予科練、昭和二十年五月十日、一飛行兵曹と

なり、六月十一日に第七百六航空隊所属と記載されてきました。

矢本史によりますと「その一機が木村隊長の銀河三人乗りの飛行機で、同乗の一人が三浦大策一飛曹で岩手県田老町東方沖七・五キロ沖で米軍機七機と交戦、撃墜される」と書かれていました。また大曲の農家の男の方も機銃で死亡とか、航空隊関係者十人ぐらい戦死と書かれておりました。

とにかく、空襲で飛行場は穴だらけ、格納庫は三棟共に屋根のトタンは蜂の巣のような穴だらけとなり、掩壕の中は爆撃で潰され、それはそれは酷く、交戦等はなく完全な負けでした。

八月十五日正午の玉音放送でも終戦か何がなされるがままで、私達は家が近いとて残務整理に残され、一日一日が大変長く、まだ十九歳でしたので、早く帰りたいものだと考えていました。

十一月一日に復員命令があり、これでああ帰れると喜びました。